

ゆずの歌詞における魅力

岡 畑 香緒里

第1章 はじめに

1. 研究の動機・目的

私は音楽が好きで、日々いろいろなアーティストの楽曲を聴いている。その中でも「ゆず」の曲は好んで聴いていて、その歌詞に元気をもらったり、癒されたりしている。そんな中で彼らの作る歌詞に魅力を感じるようになった。しかし具体的にどこが良いのかを説明するのは難しい。そこで、ゆずの2人が作る歌詞に注目して、語彙、文末表現、構造、テーマの面でどのような特徴があるのかを分析し、ゆずが作る歌詞の魅力とは何なのかを明らかにしていきたい。私はゆずの歌詞には人を励ましたり応援したりする内容の歌詞が多くあるように感じる。そしてそのような言葉でもって、人を元気づけてくれるのが彼らの歌詞の魅力なのではないだろうか。

2. ゆずについて

1998年にメジャーデビューした、ストリートミュージシャン出身のフォークデュオで、メンバーは小・中学の同級生である北川悠仁と岩沢厚治。デビューする前は神奈川県横浜市の伊勢佐木町で路上ライブをしていた。

最初は岩沢が一人で活動していたが、そのことを知った北川が「一緒にやりたい」と告白したことがきっかけで1996年3月にゆずを結成し、2人で路上ライブをするようになる。デビュー後の1998年8月30日に行われた最後の路上ライブでは7000人を集め、路上ライブが社会現象となるきっかけとなった。デビュー15周年の2012年には3枚目のベストアルバム「YUZU YOU[2006-2011]」をリリースした。2012年までには36枚のシングルCD、20枚のアルバムをリリースしている。これらはオリコンランキングで上位にランキングされ、多くのヒット曲を作り出し、幅広い世代から支持を得ている。

3. 研究対象楽曲

シングルCD発表曲はアーティストによるメッセージ性が強いと考え、シングルCD収録曲を対象とすることにする。ゆずが1998年のメジャーデビューから2012年8月までにリリースした、シングルCD収録曲「夏色」から「また明日」までの43曲を対象とする(ダブルA面の曲を含む)。

第2章 単語の分析

1. 未来へ向けた言葉

第1章でも述べたが、私は日ごろからゆずの楽曲を聴いていて、思うことがある。それはゆずの歌詞は人を元気にさせる力があるということだ。そのように感じるのは歌詞の中に人を応援したり励ましたりしている言葉が多く登場するからなのではないだろうか。

実際に歌詞を見てみるとゆずの歌詞の中では、「生きる」、「歩く」、「進む」、「歩き出す」、「踏み出す」のような前に進んでいくという意味の単語が目立っていた。今回の研究対象である43曲のうち、38曲にこのような前向きな言葉が登場している。未来に向けた前向きな言葉がほとんどの曲で使用されているのである。以下に、いくつか例を示してみる。

①生きる

「生きる」という単語は、生命力がみなぎっていて、前向きな言葉の1つであると感じる。「少年」では「自分らしく温かく生きていこう」という言葉で、うまくいかない現実もあるけど、まわりに流されず生きていくという決意が表されている。「いつか」のなかでも、「生きていく」という言葉が登場する。さらに、その前には「明日」という語も加えて、未来へ進んでいくということを描いている。また例のように、「行く」という補助動詞をつけ、継続の意味を表しているところがポイントになっている。未来に向かってという前向きさを感じられる。

②歩く・進む・踏み出す

「歩く」は「虹」「からっぽ」「シュミのハバ」「桜木町」などの歌詞に登場する。「生きる」の場合と同様に、「行く」という動詞が後に用いられていたり、

「歩き出す」という形で表現されることが多い。また、「進む」は「翔」や「歩行者優先」などの曲に登場する。どちらの語も前進することを表している。

「シュミノハバ」では「そこから先の道の上を歩き出せばいい」とあり、「翔」では「その先にある 明日へ僕ら進むんだ」とある。「歩く」や「進む」は「道」や「明日」といった、人生や未来を思い起こさせる単語が前につくことが多い。したがってここでの「歩く」や「進む」は人生を進んでいく＝生きていくという意味だろうと考えられる。「歩く」や「進む」も、「生きる」と同じく前向きさが感じられる単語である。

一方、「踏み出す」は「一步」という単語と一緒に用いられることが多い。「アゲイン2」や「からっぽ」では「小さな一步踏み出した」「一步踏み出すよ」とある。また、その前の文章には、「答えなんか無くても」や「答えは今も見つからないまま」と迷っている心境が描かれている。人生の中で、迷いながらも勇気を持って新しい場所、世界、苦手だと思っていることに挑もうと決意する様子を表しているのだ。聴き手にとっては、気持ちを動かして、やる気を起こさせてくれるような言葉なのである。

ここまで例として挙げてきた語の他にも、前向きな言葉は登場する。「シシカバブー」での「さあ突き抜けろ」や「雑多な闇夜を突き破れ」、「虹」での「越えて」などがそれに当たる。「突き抜けろ」や「突き破れ」は、「踏み出す」と同様に、困難に立ち向かっていく意思が伝わってくる。さらにそれに加えて、勢いも感じられる。「越えて」という語は、今現在抱えている不安や苦しみは、より良い未来のためにある、だからこれを乗り越えていけという力強いメッセージが読み取れる。

③そばにいる

以上のような前進することを意味する前向きな言葉のほかに、もう1種類勇気付けられるような言葉が登場する。それは「そばにいる」という言葉である。この言葉は「いつか」「桜会(さくらえ)」「Yesterday and Tomorrow」「翔」であるように、「傷ついても」や「一人」で「泣いていても」という言葉で、悩み、苦しむかもしれない現実を描いた上で、たとえそのようなことがあったとしても、いつでも君のそばにいて応援しているということを言っている。「そばにいる」という言葉でも人を応援しているのである。ただ「生きる」や「踏み出す」などの言葉で元気づけるだけではなく、迷ったり、落

ち込んだりしたときでも、そばで見守っているということを書くことで、聴き手に安心感と心強さを感じさせ、勇気を与えているのだと感じる。

これらのことから、ゆずの歌詞の中で「元気付けられる言葉」とは、「歩き出す」「踏み出す」などの前進を意味する言葉、そして「そばにいる」という温かさを感じる言葉であるということがわかる。例のように、「明日」、「未来」、「道」などの人生を示すような言葉とともに「生きる」、「歩く」のような前進するという意味の単語が用いられることで、未来へ向かって前向きに生きていこうというメッセージが感じられ、元気付けられるのではないだろうか。

2. マイナスイメージの言葉

前節では、未来に向けた前向きな言葉について述べたが、歌詞を見ていると、もう1つ別の類の単語も頻繁に登場していることがわかった。それは前向きな言葉とは正反対のネガティブな意味にとれる単語である。ネガティブな単語とは、日常の中での悩み、悲しみを表す言葉のことである。この言葉には、直接的な表現のものと間接的な表現のものがある。日常の中で感じる悩み、不安、悲しみといった、聴き手側も感じたことのある感情や状況を書き表しており、共感を得る要素となっているようだ。

①直接的な表現

「with you」には、「焦る気持ち 行き詰まり 本当は怖くて」と未来へ進むことに不安を抱いている気持ちを素直に描いている。「翔」では、目の前に迫ってくる試練を「壁」と表現し、それによって起きる不安な心境を「心がぎゅっと締め付けられて 不安が僕らを押し潰そうとする」というように、「不安」や「押し潰そうとする」という言葉で直接的にわかりやすく表している。「虹」でも「劣等感」「空虚」「悲しみ」という言葉を用い、悩んでいる「君」の心境を描き出している。このように、「不安」「悲しみ」「劣等感」「空虚」などのような直接的な言葉で、弱っている心の状況を素直に言葉にしているのである。

言葉だけで後ろ向きな心境を描いているのではない。日常のワンシーンを描くことによって文章全体でマイナスイメージを感じさせていることもある。「心のままに」では、「嗚呼 今日慌ただしい一日が終わりを告げて 白

いため息は星の無い空へ消えてゆく」というようにいつもと変わらない1日が終わっていかうとしていることを言い、そんな毎日に疲れ果てて嫌気が差している様子が描かれている。「白いため息」や「星の無い空」で悲壮感を漂わせ、さらに「繰り返す行き詰まり」、「見失いそうになる」という言葉でマイナスイメージを連想させている。

一方の「慈愛への旅路」では、「疲れ果てた」「消化不良」「灰色」「押し潰されそうな」という語を用いて、人生に悩みや不安を抱えている人の空しさを感じる心境を描いている。さらにそれだけでなく、「市営バスの窓に 映るのは疲れ果てた顔」という表現がされており、誰もが経験のある状況や場面を描いているため、非常に親近感を持って、曲を聴くことができるのではないだろうか。

②自然に関する言葉での間接的な表現

ゆずの歌詞では日常のマイナス面を描き出す単語として、「雨」「風」などの自然に関係する単語を用い、間接的に表現することがある。

「アゲイン2」では、勇気の湧いている気持ちを「花」に、そしてそこに訪れる困難を「躊躇う風が吹き戸惑う雨が降り」というように、「風」や「雨」にたとえている。「躊躇う」や「戸惑う」というネガティブな単語と一緒に用いることで、人間が感じる悩みや悲しみを表していることが想像できる。

また「陽はまた昇る」、「Yesterday and Tomorrow」、「青」では先ほどの「アゲイン2」とは少し異なり、「躊躇う風」や「戸惑う雨」というようなわかりやすい表現はされていないが、前後の文章から人生におけるマイナス面を表す意味で用いられていることが想像できる。「陽はまた昇る」では、人生に悩んで、迷っている心境を「降りしきる雨の中分からなくなって 傘もささず立ちすくんでいたんだ」と「雨」という単語で表している。「Yesterday and Tomorrow」でも落ち込んでいる気持ちを「さえぎる雲消える空 突然降り出す夕立ち 僕らは為す術も無くて 雨に打たれてしまうけど」と「雲」「夕立ち」「雨に打たれる」という表現で示している。「青」では、「冬の中」「凍つく寒さの中」「傷跡」というマイナスを感じさせる言葉とともに、降りかかってくる困難に負けてしまいそうな状態を「強い北風」に「吹き飛ばされそう」としている。以上のように心の中の不安や悲しみを「雨」や「風」などという自然を表す言葉で間接的に表すこともあるの

である。

2005年にゆずがリリースしたベストアルバム「Home [1997-2000]」の歌詞カードには、音楽評論家の長谷川誠氏によるこんな評論が記載されている。

歌の主人公もヒーローでも優等生でもなんでもない。どちらかと言うと、情けないところ、ダメなところもたっぷり持っている。劣等感を持っているし、挫折したり、落ち込んだり、悩んだりすることがよくある。そんなごくごく普通の人間だ。(中略)背伸びせず、ありのままの自分たちをさらけだしていく歌なのだ。だからこそ彼らの歌は聴き手のすぐ隣に寄り添ってくれるような「近さ」と「温かさ」とを備えている。

長谷川氏が述べているように、ゆずの歌詞は、落ち込んだり、悩んだりするような、現実を描くことで、ありのままの自分をさらけだしているのである。誰もが経験したことのあるような日常のなかでの、うまくいかないところ、弱気になってしまう心情を描いているため、聴き手は親近感を感じ、共感することができるのである。

3. 指示語

ゆずの歌詞の中にも指示語が登場する。ここで注目するのは登場回数が多かった、「この」「その」「あの」という3つの指示語である。これらの指示語は、聴き手に感情移入させる働きをしていると考えられる。以下に例を示す。

①「この」

まず、「この」について試みる。歌詞を見てみると、「この」は「長い長い下り坂」「景色」「場所」などのある場所を表す語の前についていることがわかる。特に「景色」や「場所」という語は場所が特定されておらず、曖昧なままとっている。

井出氏(1959)は、コ系の指示語の役割について、話し手が聞き手との心理的距離をなくして、身近に話しかけようとする効果をねらったものとみることができると述べている。このことは歌詞の中でも当てはまるのではないだろうか。「夏色」には、「この長い長い下り坂を君を自転車の後ろに乗せて」というフレーズがある。「長い長い下り坂を」に「この」とつけることによって、聴き手側は自分の目の前に下り坂がある状況を思い浮かべることが容易になる。そして歌詞の世界に入り込み、その下り坂を歌詞の中の主人公と一

緒に自転車で下っていくという場面を体験しているように感じるのではないだろうか。実際に作詞者がイメージしている下り坂とまったく同じものを聴き手がイメージできるわけではないが、自分なりに、目の前に下り坂が続いている景色を思い浮かばせて、聴き手を歌詞の世界へ引き込み、聴き手自身が実際にその瞬間を経験しているかのように思わせる効果が「この」という指示語にはあるようだ。

「逢いたい」や「くず星」では、「あなたが好きだったこの景色を」、「誰もいない この場所」とある。「この」に「景色」や「場所」といった語が続き、特定の場所をはっきりと限定していない。このような場合は、聴き手側がそれぞれで自分の記憶に照らし合わせ、ある特定の場所を思い浮かべ、その場に来ている自分をイメージさせられるのであろう。

「この」とすることで、作詞者が聴き手との距離感を縮め、聴き手の人々を歌詞の中の世界へと引き込み、まるでその場面に自分がいるかのように感じさせたり、聴き手それぞれの思い出の中にある特定の場所や似たような気持ち思い浮かべさせて聴き手の共感をさそうのである。

② 「その」

次に「その」について。「その」は、「翔」での、「泪すら枯れ果ててしまいそうになっても そとその目を開けてごらん」、「ストーリー」での、「筋書きなんて自分で変えてやれ その手で」などが例として挙げられる。「その」は例にあるとおり「目」「手」「足」といった、体のある部位を表している。倉持氏(1987)はソ系の指示語について、相手の領域に属するととらえられるものを「ソ」で指示すると述べている。「虹」の歌詞でも「君だけの道 その足で歩いて行くだよ」と、「君」に話しかけている形の文章のなかで登場しており、「その足」というのは、作詞者が想いを伝えようとする相手である「君」の足のことを指していることがわかる。

歌詞の中での話し相手、「君」というのは、作詞者の想像する特定の人物であることもあるが、聴き手側の人間でもある。よって、「その」の後に来る、「目」「手」「足」は聴き手を含めた「相手」のものを示しているということになる。確かに、「自分の手で」と表すよりも、「その手で」のほうが、相手(作詞者または曲の主人公)に話しかけられ、自分のことを言われている印象を受ける。

「その目」や「その手」という表現は、相手に向けられた表現であり、聴き手側はそれぞれ、自分へ向けられている言葉として受け入れ、感情移入するのではないだろうか。

③「あの」

最後に「あの」についてである。「超特急」では、「夢を見たあの日僕らは」と夢に向かって頑張っていた日々を指しており、「友達の唄」では、「何も分からなかったあの頃のように」と友人と過ごした時間を思い返している。このように「あの」には「日」「頃」などの時間を表す語につくことが多く、過去のある時点が示される。

「ア」で指示されるのは、既に相手と共通体験を得ているような内容について示すときだということを倉持氏(1987)は述べているが、歌詞の中での作詞者と聴き手という関係の間では、共通体験を得ているということは無いに等しい。ただし、まったく同じ体験をした時間を思い浮かべるのは困難でも、聴き手にとっての、それぞれの「あの頃」を思い浮かべることはできるであろう。「あの」という指示語があることにより、聴き手は歌詞に自分自身の思い出を重ね合わせながら「あの日」や「あの頃」を思い浮かべて、曲に想いを寄せるのである。

ここまで「この」「その」「あの」という3つの指示語についてみてきたが、この3つに共通することは、聴き手にある場面や物を想像させて、歌詞の世界へと聴き手を引き込むということである。作詞者である北川は雑誌のインタビューでこのように述べている。

根底に僕の想いがあったとしても、あくまでもゆずとして出す作品なのだから、聴く人それぞれの出会いや別れに当てはまるものということは心掛けました。

(『別冊カドカワ総力特集ゆず 2009 カドカワムック』2009年)

「聴き手それぞれに当てはまるように」というのは、指示語が使用されているところからも表れているのではないだろうか。指示語で表すことで、聴き手の想像力を働かせる結果となり、聴き手それぞれで自由に自身の経験と照らし合わせながら、歌詞の世界へと入り込めるため、感情移入することが容易になっているのである。

4. 代名詞

歌詞というのは作詞者が誰か、相手に向かって自分の想いを伝えるためのものである。したがって誰に向けて書いているのかということも重要なことである。ゆずの歌詞は誰に向けて書かれたものであるのだろうか。

人称代名詞に注目してみると、「君」「僕」「僕ら」という言葉が多く見られた。三人称代名詞は少なく、「君」と「僕」という二人称を用い、2人の間でのやり取りとして書かれているといえる。特に相手を「君」と表されていることにより、「仲間」であることを意識させられ、親近感を感じる。一方の一人称である「僕」も「私」と「俺」との中間地点にあり、硬くもなく、親近感がある。伝える相手の性別・年齢層を問わない、親近感の持てる代名詞を使用しているのである。

「呼吸」では、「君はまた傷を負う」と、「僕」からみた「君」の状況を表したり、「僕は行く君とともに」と「僕」の意思を「君」へ向けて提示している。また、「Hey和」では、「君を想うよ」と「君」に対して語っており、「with you」では「諦めないさ 僕はゆくよ どこまでも どこまでも」と自分の決意を表している。「君」という相手に向けて、「僕」が自身の考えを述べているということがわかる。

「アゲイン2」では、「誰もがみんな一人ぼっちを抱きしめながら生きている」というように、一人称「僕」、二人称「君」のほかに三人称である「誰」「みんな」が使用されているが、これは作詞者が想いを伝えたい相手(聴き手を含める「君」)に向けて、エールを送るための理由として励ますために用いたものである。そして、「君が君である為に」「僕と共に行こうアゲイン」と、落ち込むこともあるだろうけど、自分なりでいいから諦めずに前に進んで行こう、僕と一緒に。という、暖かさのあるメッセージを送っている。

「一緒に」というキーワードは、「僕ら」という代名詞も込められている。「マイライフ」においても、「僕らはずっと同じ夢を見て笑おうよ」と未来へ共に進もうということが示されている。一方「虹」では、「曲がりくねった道の途中で いくつもの分岐点に僕等は出会うだろう」とあり、悩んだり、不安を感じたりしているのは、「君」だけではなく、「僕」も同じだということを示して、聴き手側を励ますような、心に寄り添うような形となっている。

北川は雑誌のインタビュー(2009)で、「自分たちの歌を必要としてくれる人全てに丁寧に届け続けていきたい」と述べている。さまざまな人に想い

を伝えようとしているため、「僕」、「君」という人の性別・年齢層を問わない仲間意識を感じさせる代名詞で表されていると考えられる。そして、「僕」と「君」という近さが感じられる間で、やり取りがなされ、「僕ら」で、現実には嫌なこともあるけど、一緒に未来へ進もうというメッセージを送っているのである。

第3章 文末表現

私自身、ゆずの歌詞を聞き取ったり、読んだりしていると、話しかけられているような感覚になる。そのように感じられるのには、先ほどの「君」と「僕」との間でやり取りされるということも関係しているのだろうが、文末表現がもうひとつの要因となっているのではないだろうか。

ゆずの歌詞の文末表現は、「行こう」などのような勧誘表現、疑問符、「よ」「だよ」の主張を強調する終助詞の3つが印象的であった。

1. 勧誘表現

勧誘表現で表されている語は、第2章で挙げた、未来へのプラス志向の単語であることがわかった。そのような前向きな言葉が、一緒に何かをしようと誘うような勧誘表現で書かれていることにより、聴き手は自分に呼びかけられているように感じ、それもまた、元気付けられるという要因の1つになっていると考えられる。

「歩行者優先」では「素晴らしい明日」を「探しに行こう」とある。悩みは尽きないけど、「明日」に向けて、一緒に進んでいこうということが書かれている。「シシカバプー」の「Yes 行こう Yes 行こう Yes」、「夢の地図」の「心の準備できたら行こう」は、何かに立ち向かおうとしている人を「行こう」という言葉で応援している。他にも、「陽はまた昇る」の「まだ見ぬ明日へ走り出そう」「差し込む光へ手を伸ばそう」などが例として挙げられる。これらのように、前向きな言葉が、相手を誘うような勧誘表現で書かれているのである。これによって、聴き手は作者から自分へのメッセージであると受け止め、呼びかけているように感じ元気付けられるのではないだろうか。

2. 疑問符

疑問符で表されているのは、歌詞の中の主人公が自分自身に問いかけを行っているものと、相手に対して問いかけられるものの2種類がある。

「心のままに」では、理想と現実の間で悩んでいる心境を描いている。「このまま矛盾の中に飲み込まれてしまうのかい？」と疑問を投げかけているが、この曲の歌詞には、二人称の名詞や代名詞は登場しない。したがってこの歌詞の中での問いは、主人公が自分自身に向けたものということになる。しかし「繰り返す行き詰まりに時おり自分を見失いそうになる」という同じような状況に聴き手側の人間も陥っていたとしたら、そこに共感し、この問いはまるで自分に投げかけられているかのように感じられるのではないだろうか。

一方、「夢の地図」での「あきらめるにはまだ早すぎないかい？」や「ストーリー」での「どうしたの？さえない顔して」というフレーズは、歌詞の中に「君」という、相手を表す言葉も登場していることから、全て相手である「君」に問いかけを行っているものであるといえる。この場合、聴き手側は「君」の視点からその問いを受け止めるため、話されているように感じるのであろう。

聴き手は、歌詞のなかの主人公と、相手である「君」の両方の視点から歌詞の内容に感情移入することが可能なので、歌詞の中の主人公が自分自身に問いかけを行っているものと、相手に対して問いかけているものの両方を自分に問いかけられていると感じるのである。

3. 「よ」と「だよ」

「よ」も「だよ」も相手に話しかけるようにして作者自身の考えを示しながら、相手を励ましている。「よ」の例としては、「水平線」の「そこに行くよ」、「またあえる日まで」の「変わらないままで ずっといようよ」、「嗚呼、青春の日々」での「自分なりに生きてゆくよ」などがある。どれも、作詞者や歌詞の中の主人公が、自分はこのようにしようと考えている、または、こう思っているけど、君はどう？というニュアンスで、相手に話しかけるように、自分の意思や考えを提示している。「だよ」の例としては、「友達の唄」の「何も変わらない物だってあるんだよ」、「虹」での「それぞれ悲しみを抱えてんだよ」、「そうやって痛みや優しさを知って行くんだよ」、「間違いなんてきっと何一つ無いんだよ」などがある。「だよ」は「よ」に比べると、作詞者の考えを相手に言い聞かせている要素が強く表れているように感じる。

また、「だね」のように、相手が、その提示した状況であると、作詞者の考えで一方向的に決め付け、意見を強要しようとはしていない。あくまで作詞者が自分の考えはこうなんだよと伝えようとしているだけである。自分の意見を提示し、相手の気持ちを楽にさせたり、励ましたりするように書かれているときに「だよ」で聴き手に呼びかけているようだ。

第4章 構造

ここまで、単語や文末についてみてきたが、この章では、歌詞の全体的な構造についてみていく。ゆずの歌詞は、1番、2番のツーコーラスの形をとるものがほとんどである。構造として、Aメロ→Bメロ→サビで1番が構成されている。この構造がもう一度繰り返され、そして最後にCメロ→大サビ→Dメロとなる。内容としては、1番で言ったことを2番で言い換えていることが多い。

ゆずの歌詞には、未来に向けた前向きな言葉がほとんどの曲の中に登場すること、またそれとは反対に日常の中で生まれる不安や悲しみについても書き表されていることを第2章で挙げたが、その言葉が登場する仕方には、ある順序があることがわかった。それは、マイナス志向からプラス志向へという構造である。

最初に例として示す「栄光の架橋」は、Aメロ→Bメロ→サビで1番が構成され、その後同じ形の2番があり、最後にAメロ→大サビ→Cメロという構成になっている。この歌詞は、夢を追う途中で挫折しかけながらもあきらめずに走り続けてきたことを振り返りながら、決戦の時を迎えた者にエールを送っている内容である。この歌詞をみると、最初のAメロでは、「誰にも見せない涙があった」「決して平らな道ではなかった」とそれまでの悩み苦しんできた経験を思い起こさせるように、過去を振り返る形で描かれている。サビでは、「いくつもの日々を越えて 辿り着いた今がある」とこれまでやってきたことを肯定して「現在」に視点を置いて、「もう迷わずに進めばいい」というように、夢の実現に向けて立ち向かっていこうとする人の背中を押している。

2番でも1番と同じく、最初に「悔しい」「怖い」「夜」「もう駄目だと全てが嫌になって逃げ出そうとした時も」と不安や悲しみに浸っていたときの

ことを思い起こさせながら、サビ部分で「光」「希望」という言葉と共に、「さあ行こう 振り返らず走り出せばいい」とエールを送り、マイナスな志向から、プラスの志向へと移している。その後、再びAメロがあり、マイナス志向に戻るが、これは、プラス志向の大サビやCメロに向けたものであり、後のプラス志向を際立たせている。

次に示す「ストーリー」という作品もマイナスからプラス志向へと転換する。構造に関しては2番までは「栄光の架橋」と同じであり、その後は、Cメロ→サビ→大サビ→Dメロと続く。この歌詞は人生を1つのストーリー(物語)として表現している。辛いことがあって、何をしていったらいいのか迷うときや、落ち込むこともあるが、深く考えすぎずに、自分自身で自分の人生のストーリーを作り上げていこうというメッセージが込められた応援ソングである。AメロとBメロでは「どうしたの? さえない顔して」という言葉で、何か問題を抱えている「君」に対して声をかけ、そんな風に元気が出ないときもあると、その状態について受け入れながらも、「だけど雨は必ず上がるから」と、悩みもいつか晴れるということ「雨」に例えながら励まし、サビの部分になると、「ラクに行こう」という言葉で「君」の気持ちをリセットさせて「また走り出せる」「空の向こう側」「僕らなら超えてゆけるさ」と爽やかさを感じさせるような未来に向けた前向きな言葉たちで相手に向けてエールを送る。

2番になると、Aメロ、Bメロでは、「そうだな僕は」と「君」に自分自身の弱さを打ち明け、「疲れ果てて」や「虚しさ」などの言葉で、マイナスな心境を描き出している。サビになると、「焦らなくても!!」「まだ旅の途中じゃないか」と「君」の悩みをほぐす言葉をかける。そして、落ち込んだことも、「いつか笑いあえる」と未来へと視点を移し、「君」を元気付ける。続く、Cメロ、サビ、大サビ、Dメロでは、「筋書きなんて自分で変えてやれ」「さあ始めよう」などの明るい言葉で「君」に希望を与え、応援している。

最初に悩んだり落ち込んでいた状態を示し、そんな日常の中でのマイナスな面を受け入れたり、共感したりした上で、そんなネガティブな気持ちもいつか晴れるという意見を示し、徐々にポジティブな志向へと転換させていく。そしてサビで前向きな言葉を炸裂させ、聴き手をうまく前向きな志向にさせているのだ。マイナスからプラスへというのが「元気付けられる」ことの1つの鍵となっているのではないだろうか。

2つの例で見たように、マイナスな言葉からプラスの意味の言葉へという構造となっているのである。最初に過去や現在で感じている、不安や悲しみなど、マイナスな面について描き、相手の気持ちに寄り添い、共感を得て、そこから、「進む」や「明日」などの希望がある前向きな言葉で気持ちを明るくさせ、うまくいかない現実もあるけど、未来を信じて一緒に乗り越えていこうというメッセージを聴く側の人間へ発信して、人々を元気づけているのである。

第5章 曲のテーマ

ゆずの歌詞をテーマ別に分けると以下の4つに分けられた。

①恋愛 ②友情 ③応援 ④主張

「恋愛」をテーマにした曲は、恋人や親への想いが描かれたもので、「二人」「好き」「会いたい」「想う」「キス」「赤い糸」などの恋愛に関する言葉が登場するもの、「友情」には、「友達」「みんな」「青春」「アイツ、奴等」などの言葉が登場するものということを基準に仕分けた。「主張」というのは、世の中や作者自身のことを題材として、現実に嫌気を感じながらも、その現実を受け入れた上で、未来へ進もうとする作者の意思が描かれているものである。「応援」をテーマとしているものとの違いとしては、相手に話しかけるような要素が少ないこと、作者自身のことを描き出しているものだということである。

今回の研究の調査対象楽曲である43曲のうち、「応援」をテーマにされているのが17曲と1番多く、2番目は「恋愛」で15曲、3番目は「主張」で8曲、最後は「友情」で3曲であった。応援をテーマとしている曲がもっとも多いことから、ゆずの2人が歌詞の中で伝えようとしている、最大のメッセージテーマは「応援」であるといえるのではないか。

また、ここで一番注目したいのは、どのテーマの場合も人を応援する要素が含まれているものが多いということである。「応援」や「主張」をテーマにされているものが、人を応援したり、励ましたりするような言葉が使用されていたり、そのような雰囲気が出ていることは言うまでもないが、「恋愛」や「友情」をテーマとしている曲でも、人を応援している。

「Yesterday and Tomorrow」を例としてみる。この曲の歌詞には、「二

人」「出会う」「抱きしめる」などの言葉も登場しており、曲のテーマは「恋愛」であるとわかる。しかし、恋人への想いを綴るだけでなく、『「負けないで」って どんな時も 君のそばにいるから』、「そうさ行こう 僕らの明日へ」と、何か悩んでいる様子だが、それを表には出さずに「強がってばかり」いる、そんな恋人に対してエールを送る内容となっている。この曲について北川は以下のように述べている。

この曲は、ラブソングでもあるんですけど、それだけじゃなくて。(ライブの)会場に来てくれた人に届けたいという気持ちも入っていると思います。新たな場所に進んでいくための特攻隊長みたいな曲でもありませんね。

(『別冊カドカワ総力特集ゆず 2009 カドカワムック』2009年)

北川自身もラブソングでありながら、応援歌であることを認識している。主なテーマは「恋愛」であっても、特定の恋人だけでなく、多くの人を応援する要素を持っているというのはゆずの歌詞の中で大きな特徴と言えるのではないだろうか。

友情をテーマにした曲でも同じく、人を応援している。次は「友達の唄」を例に見てみる。この曲は、タイトルにも「友達」とあるとおり、友情をテーマとされている曲である。友人との楽しい思い出を思い返ししながら、最近会えなくなってしまった友人たちへメッセージを送る形になっている。「繰り返す現実につまづいているのなら少しだけ休もうよ」、「今日は昨日の悲しみも明日への不安も全てしまって 夢見て笑ってしようよ」というように、あまり頑張りすぎず、今日は息抜きをしようという意見で、元気付けようとしている。

例を見てもわかるとおり、「応援」をテーマとしていないものでも、人を応援する要素が含まれている。このことから、ゆずの書く歌詞の最大のテーマは「応援」ということが言えるだろう。恋人を想って書いたものも、友人について書いたものも、いつも根底にあるものは「人を支え、応援する」ことであり、ゆずが聴き手に伝えているメッセージというのは、悲しみや不安を感じて嫌になる現実もあるけど、それでも前向きに生きていこうという「エール」なのである。

第6章 まとめ

これまで論じてきたことをここでまとめてみる。

2章…今回調査したほとんどの楽曲に「歩き出す」「踏み出す」などの前進するという意味の未来へ向けた前向きな言葉が登場する。これによって、聴き手の気持ちをプラス志向へ導いている。また、「そばにいる」という言葉で落ち込んでいる相手に対して、安心感と心強さを感じさせ、勇気を与える。一方で、それとは反対の現実でのマイナスな面についての単語も登場している。「悲しみ」などの直接的な表現、さらに「雨」「風」などの自然語での間接的な表現の両方をうまく使用し、日常の中で感じる不安や落ち込む心情を描き、聴き手に共感をもたらす。

「あの」「その」「この」などの指示語を用い、場所や時間などを具体的に特定しないことで、聴き手側が自らの経験や思い出の場面と照らし合わせることができ、感情移入しやすくなっている。

人称代名詞は、「君」「僕」「僕ら」という二人称のものが多く、作詞者は不特定多数の人々に想いを伝えようとしている。聴き手を含む「君」に向けて作詞者である「僕」が自身の考えを示し、「僕ら」で一緒に未来へ進もうというメッセージが込められている。

3章…文末は勧誘表現や「～よ」「だよ」「？」で表され、相手(聴き手や特定の人物)を誘ったり、問いかけたりしているので、聴き手は呼びかけられているような印象を受ける。

4章…曲は、マイナスな言葉からプラスの意味の言葉へという構造となっている。Aメロ・Bメロでは、過去を振り返ったり、現在抱えている不安や悩みについて描かれる。そしてサビで、それらの現実を全て受け入れた上で、未来へ進んでいこうという意味が示される。

5章…曲のテーマは①恋愛②友情③応援④主張の4つに分けることができるが、一番多くテーマとしているのは「応援」である。ただし、どのテーマであっても人を応援する要素が含まれているため、ゆずの歌詞の最大のテーマは「応援」であると考えられる。

最初に予想していたとおり、人を応援したり、励ましたりする言葉は、ほとんどの曲で登場していた。また、そればかりではなく、日常での不安、悲

しみについても示すことで、聴き手の共感を誘い、心を動かしているというのも特徴の1つであった。聴き手を歌詞の世界へと引き込む役割をしている指示語も印象的であり、「僕」と「君」という二人称の間でのやり取りや、話しかけるような文末表現によって親近感が感じられるのも、ゆずの歌詞ならではである。歌詞の全体的構造においても、聴き手をマイナス志向からプラス志向にさせるような要素がみられ、ゆずは多くの人々に温かさのあるエールを送っているということを改めて感じた。現実を受け止めた上で、未来に向かって一緒に生きていこうというメッセージを聴き手側へ発信して、人を応援してくれるのがゆずの歌詞の魅力なのである。

【参考文献】

- 井手至(1959)「代名詞」『続日本文法講座1』明治書院
 伊藤雅光(1997)「ユーミンの言語学③」『日本語学』第16巻7号 明治書院
 伊藤雅光(2002)『計量言語学入門』大修館書店
 上田起士(2010)『よくわかる作詞の教科書』ヤマハミュージックメディア
 オリコン芸能人辞典 株式会社oricon ME ORICON STYLE
<http://www.oricon.co.jp/prof/artist/30824/>
 歌詞検索サービス 歌ネット Copyright(C)2001-2014 PAGE ONE All
 Rights Reserved <http://www.uta-net.com/>
 倉持保男(1987)「文章中の指示語の機能」『国文法講座 第六巻 時代と
 文法—現代語』山口明徳編 明治書院
 『別冊カドカワ 総力特集ゆず Going Home』角川マガジズ(2005)
 『別冊カドカワ総力特集ゆず 2009 カドカワムック』角川マガジズ(2009)